清流のまち
IBIGAWA
揖斐川町

揖斐川

わたしたちのまちの広大な森にその源を発し、

小さなせせらぎを集めてやがて大きな流れをつくり、

四季折々に豊かな表情をみせます。

木曽三川のひとつに数えられる揖斐川は、福井県との県境に位置する冠山（標高1,257m）に源を発し、山間渓谷を貫き、肥沃な濃尾平野を流れ、伊勢湾に注ぎます。この地に住む人々は昔から、川の恵みを享受し、ときには水害の脅威に苦しめられ、川とともにくらしてきました。

川が支えた人々のくらし

簗【やな】

揖斐川とその支流には、昔から多くの種類の川魚が住み、特にアユは身が引き締まり味が良いことで知られていました。

アユを捕らえるために「簗」という漁法が、江戸時代以前から用いられていたとみられます。揖斐川の簗は、流れに逆らわないように川に対して斜めにせきを作るのが特徴で、流れを集めて魚を自然に竹簀に落とします。房島には御簗場があって、江戸時代には入札によって簗業者を決め、落札した者が漁業権を持ち、運上（税金）を納めました。

輸送・交通

近代的な陸路が整備されるまでは、揖斐川やその支流は物資の輸送や交通に大きな役割を果たしました。

江戸時代には、藤橋や坂内といった上流の山林で伐採された木材を、筏に組むなどしてさかんに川に流し下流へ送られ、山間部で生産される薪や炭は船に積み川下げされました。揖斐川が山々から抜け出たあたりには番所が設けられ、筏や船の荷を検めて通過税を取りました。

また揖斐川にはいくつもの川湊や渡船場があり、荷を積んだ船や西国巡礼の人々が行き来しました。特に北方森前湊（森前土場）は、江戸時代から昭和初期まで物資輸送の重要な中継地点としてにぎわいました。上流からは木材や薪炭、地元の産物、年貢米といった物資を大垣などへ運び、下流からは塩や干魚などが運ばれたということです。

川の猛威と治水

揖斐川・粕川が流れるこの地方では、頻繁に起こる水害に人々は悩まされてきました。近世になってようやく治水体制が整いはじめ、江戸時代初めにこの地域を支配した西尾氏が、揖斐の村々を囲む堤を築いたと伝えられています。その後領主となった旗本岡田将監（しょうげん）父子は治水に情熱を注ぎました。猿尾（さるお）という石を詰めた竹かごを川の中へ突き出して水の勢いを緩めたり、尻無堤（しりなしつつみ）という切れ目を設けた堤をつくり、切れ目のところを遊水地にして水勢を弱めるなど、巧妙な工法で堤防本体の決壊を防ぎました。

これ以降治水工事は断続して行われ、明治時代から近代的な堤防の建設が進められました。

今わたしたちは…

美しい揖斐川の流れは、徳山ダム周辺の広大な森林が水源です。町内の小学生たちは授業で、身近な河川の水質や水生生物について知り、水源地域となる森林を保全することの大切さを学びます。また、町全体で河川の清掃活動に取り組み、清掃後には稚鮎の放流を行っています。山や森について理解を深め、川を大切にし、下流の人々に清流をつないでいくのは、私たちの町の役割でもあります。

▲稚鮎の放流